

他在の可能性

——カネッティにおける「変身」の思想——

宗 戸 節 太 郎

カネッティは「詩人の使命」と題する講演の中で、詩人が二重の意味で「変身の番人」である事が、最も重要な事であると述べている。詩人は一方において、変身に富んだ人類の文学的遺産を習得し、他方ますます変身が禁じられていく現代社会にあって、それに抗い、古来人間が有してきた変身の才能を、自覚的に行使する使命があるという。

カネッティは変身の語で、基本的に古代ギリシア以来ミメシスと称されてきた、人間の模倣能力、及びそのプロセス周辺を言い当てようとしている。カネッティによれば、人間はかつて変身によって人間自身となった。人間はそれにより世界を我がものとし、それによって世界に関与してきた。更に人間は変身の能力故に、他者への憐憫の情を抱く事ができるのであり、変身こそが他者へと通じる唯一の、真の通路であるという。

カネッティにとっては一人一人の人間も、自分自身が通常そう考えるようには、決して独立した精神活動を営んではない。人間の内部には、過去から現在へと連なる、また現在における様々な関係性が内包され、そもそも個人という考え方すら、大いに疑問視される。カネッティの目にはどんな生存の形式も、動かし難い、絶対的なものとは映っておらず、各々の人間が各々の内側に、現在とは異なる存在の可能性を有している。

カネッティに従えば、確かに古来権力者の権力の源泉もまた、人間の持つ変身の能力に由来する。表面のみに関わるものとして区別される模倣も、明確な目的を内に秘めた擬装もまた、人間が有してきた変身の遺産の一部である。人間が生を維持しようとする限り、自己を保存する行為も、勿論正当化されねばならない。とはいえカネッティの狙いはやはり、恐らくは合理性に回収される事のない、いかなる目的や意図からも自由な、変身における良質の部分の最大限救出する事にある。

人間は変身の力を借り、自らの環境の中で自己を主張する力を、やがて巨大な権力を手に入れた。自己を主張する力と権力とは、人間に常に独立した個人である事を求め、他方人間はその意に反して、同じ変身の能力故に個を踏み越え、群衆ともなる。「変身」の思想は、群衆と権力の問題を中心に生涯にわたって展開された、カネッティ思想の大動脈であり、カネッティの眼差しは静かに、我々が知るそれとは異なる生存の形式、他在の可能性を見据えている。